



ヤバい政治学 データで分かる政治のウラ表

[日経ビジネス オンライントップ](#) > [企業・経営](#) > [ヤバい政治学 データで分かる政治のウラ表](#)

笑う門には「票」来たる

第2回 顔認証技術が明らかにした無責任な投票行動

2012年6月13日 水曜日 福元 健太郎、堀内 勇作

[前回](#)、有権者は、かなり自己中心的な理由で投票するか棄権するかを判断していることを指摘した。今回は、投票所に足を運んだ有権者が、どのようにして投票先（特に、候補者）を決めているかを論じたい。データを使った研究結果が示すことは、かなり「ヤバい」かもしれないからである。

「まっとうではない」有権者の姿が明らかに

さて、「投票先（政党あるいは候補者）を決める上で、最も重視した点は何ですか」という問いに、多くの有権者はどのように答えるだろうか。あるいは、候補者やメディアは、どのような投票理由を予想するだろうか。

この問いは、既に多くの選挙後世論調査の調査対象項目となってきたので、具体的な数字を挙げよう。2009年衆議院選挙後に実施された「JES4」という調査によると、小選挙区の候補者を有権者が選ぶ上で最も考慮した理由は、「政党支持」（43.5%）である。以下、「候補者の人柄」（15.7%）、「各党の政策」（11.5%）、「地元の利益」（7.2%）、「候補者の政策」（5.6%）と続く。

政治学者による学術研究でも、従来は政党や候補者の政策ポジションやイデオロギー、（具体的な政策とは独立した）候補者の資質、政党や候補者が有権者にもたらす具体的な利益などが、投票先を判断する上での重要な理由と考えられてきた。また、そのような研究の蓄積があるからこそ、世論調査における質問で、上記のような選択肢が設定されてきた。

しかし、ここ数年、有権者は上記のような「まっとうな」理由ではなく、かなりどうでも良い、政治とは関係のない理由で候補者を選んでいると結論づける「まっとうな」学術研究が増えてきている。例えば、選挙直前のアメフトの試合で地元チームが大勝するほど現職候補者の得票率が上がるとか、「美人（ハンサム）」な候補者ほど得票率が高くなる、といったことが明らかになっている。ここでは、筆

者（堀内）自身による、候補者の笑顔が得票率に与える影響を推計した研究を紹介したい。

候補者の顔（および表情）が、有権者の投票行動を決める上での一つの要因であることは、米国政治の研究領域においてかなり以前から指摘されてきた。しかし2005年に米プリンストン大学のアレクサンダー・トドロフ教授らが、世界で特に権威がある学術雑誌の一つとされている「サイエンス」に論文を発表して以来、候補者の顔と投票行動の関係を、ハイレクを駆使して計量的に推計する研究が急増している。

そうした研究では、候補者の写真を見ることで、調査回答者が（瞬時に）感じた候補者の資質が、有権者の（仮定的な）投票行動や、実際の得票率にどのような影響を与えるかを調べているものが多い。

一方筆者（堀内）は、大阪教育大学の仲矢史雄特任准教授と小松研究事務所の小松正代表との共同研究において、主観的に評価された候補者の資質を測定するのではなく、客観的に候補者の表情を定量化し、主観的な評価を介さない「表情そのもの」の投票行動に対する影響を推計することに取り組んだ。

最新の顔認証技術で笑顔を「定量化」

筆者（堀内）らが利用したのは、オムロン社が開発した「Okao Vision」という最新の顔認証技術である。顔認証技術は、ここ数年、多くのアプリケーションで活用されるようになった。例えば、被写体が笑った時にシャッターが下りる機能や、被写体が目をつむった場合には警告メッセージが出るデジタルカメラを使ったことがある読者も多いだろう。米グーグル社が無料で公開しているデジタル写真管理ソフト「ピカサ」や、米アップル社の「iPhoto」などでも、顔認証技術は活用されている。入国審査の際に顔写真を撮り、膨大なデータの中から犯罪容疑者など人物を特定することは、米国、オーストラリア、日本などで実用化されている。

急速に発達している顔認証技術の応用として、オムロン社が開発した革新的な機能が「笑顔指数」の測定である。顔をはじめ、さまざまな形態を数学的に表現する研究は近年発達しているが、その理論的研究と、世界各地から入手した膨大な顔写真データに基づいて、オムロン社は、典型的な笑顔モデルを構築した。そして、そのモデルを基礎に、静止画や動画にある顔の「笑顔度」を瞬時に定量化するアプリケーションを開発した。

筆者（堀内）らは、そのソフトを、日本の2000年衆議院議員選挙で出馬した672人の候補者の顔写真、及びオーストラリアの2004年連邦衆議院議員選挙で出馬した286人の候補者の顔写真に適用し、それらの候補者一人ひとりの笑顔度を推計した。

まず候補者の笑顔度の平均は、日本では約29%である一方、オーストラリアでは約42%であった。筆者（堀内）ら自身が、顔写真を実際に（目視で）確認しても、確かに、オーストラリアの候補者の方が、大きな笑顔で写真に写っている傾向がある。現首相であるジュリア・ギラードの笑顔は100%である。一方、日本では、白い歯を見せて笑うことが美德とされない文化のためか、あまり大きな笑顔を作らない候補者が多い。真面目な表情の方が、有権者の受けが良いという判断もあるのかもしれない。たとえば、小沢一郎の笑顔度は0%で、一言で言えば仏頂面だ。

笑顔だと快感を覚え、名前も記憶に残りやすくなる

次に、笑顔指数の得票率への影響を推計した。当然のことながら、得票率は他の様々な要因から影響を受けるので、統計分析では、それらの影響を取り除き、笑顔指数そのものの影響を推計することに努

めた。その結果、日本でも、オーストラリアでも、笑顔指数が大きければ大きいほど得票率が高くなることが分かった。具体的には、笑顔度が0%から100%になると、他の影響を差し引いた上でも、日本では小選挙区の得票率が2.3%ポイント高くなる。オーストラリアでは5.2%ポイントもアップする。ポスターなどで使われる顔写真の笑顔は、無視できない影響力があるのだ。

ではなぜ、笑顔の候補者には票が集まるのだろうか。脳心理学の研究によると、他者の笑顔を見た被験者は、美しい音楽を聴いたり、美味しいものを食べたりした時に反応する脳の部位が反応するという。更に別の研究では、笑っている人の名前の方が、笑っていない人の名前よりもより記憶に残りやすいという。

これらの研究が示唆する投票行動はこうだ。まず、有権者はポスターなどで笑顔を浮かべている候補者を目にとるとある種の快感を覚え、その候補者の名前をより記憶に留める。その結果、投票所でもその候補者を思い出して何となく投票する。

重要なのは、このような脳心理的作用は、候補者の政策的なポジションとは「一切関係ない」という点である。

筆者（堀内）らの分析結果によれば、選挙における候補者は、より大きな笑顔で写真に写った方がよいことになる。しかし、より大きな笑顔の候補者が、有権者にも笑顔をもたらすとは全く限らない。候補者の政策や資質を吟味することなく、瑣末な理由で有権者が候補者を選んでいるのであれば、それは、民主主義に対する重要な警告だ。

本当に顔は口ほどにものを言うのか？

これは、日本やオーストラリアに限った問題ではないであろう。すでに、政党幹部や候補者は、候補者のポスターでの笑顔といった些細なことで、有権者が投票判断をしていることを十分に理解しているのかもしれない。元スポーツ選手、元モデル、元アナウンサーなど、いわゆる知名度の高いタレントが出馬する傾向は、多くの国で観測されている。政党の政策や候補者の「立法者としての」資質よりも、「すでに全国的に有名である」とか「美人である」とかいうことの方が、有権者の投票行動に影響を及ぼすと分かっているからこそ、多くの政党がタレントに出馬を要請しているのだろう。

しかし、良い「顔」がたくさん集まった議事堂の中で、良い「議論」が交わされるのだろうか。顔は口ほどにものを言うのだろうか。「政治のタレント化」が政治過程や政策判断に及ぼす影響に関しては、今後も更に研究を続けて行かなくてはならないだろう。

参考文献

Alexander Todorov, Anesu N. Mandisodza, Amir Goren, and Crystal C. Hall, "[Inferences of Competence from Faces Predict Election Outcomes.](#)" Science, 308 (2005年), 1623-1626.

Yusaku Horiuchi, Tadashi Komatsu, and Fumio Nakaya "[Should Candidates Smile to Win Elections?: An Application of Automated Face Recognition Technology.](#)" Political Psychology, forthcoming (2012年) .

このコラムについて

ヤバい政治学 データで分かる政治のウラ表

低投票率は、政治不信が原因なのか？有権者は、政党や候補者の政策に基づいて投票しているのか？一票の格差は、過疎地と過密地の権利の問題なのか？「ねじれ国会」は議案が通らなくて困るのか？――。

政治や選挙を巡るメディアの報道は、ステレオタイプの「政局報道」ばかりが目立つ。だがそこに、データを駆使した統計分析の手法を持ち込むと、全く違った現実が見えてくる。日本だけでなく世界の政治学界を舞台に研究活動続ける気鋭の政治学者である筆者たちが、日本の政治に隠れた真実を、アカデミックかつスマートにあぶりだす。

⇒ [記事一覧](#)

著者プロフィール

福元 健太郎（ふくもと・けんたろう）



学習院大学法学部教授。1972年生まれ。1995年東京大学法学部卒業。同助手、米ハーバード大学客員研究員などを経て現職。博士（東京大学、法学）。専門は政治学方法論、立法政治、日本政治。著書に『[日本の国会政治](#)』『[立法の制度と過程](#)』など。ホームページは[こちら](#)。

（写真：陶山 勉）

堀内 勇作（ほりうち・ゆうさく）



オーストラリア国立大学クローフォード公共政策研究大学院准教授。1991年慶応義塾大学経済学部卒業。1995年米エール大学経済学修士、2001年米マサチューセッツ工科大学（MIT）政治学博士（Ph.D.）。2012年7月から米ダートマス大学政治学部三井冠准教授。専門は比較政治学、計量政治学。

日経BP社

日経ビジネス オンライン [会員登録・メール配信](#) — [このサイトについて](#) — [お問い合わせ](#)

日経BP社 [会社案内](#) — [個人情報保護方針/ネットにおける情報収集/個人情報の共同利用](#)
— [著作権について](#) — [広告ガイド](#)

© 2006-2011 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.